



書評

[評者]

小西 竜太

エム・シー・ヘルスケアホールディングス
株式会社 上席執行役員 CSO/CMO/
元・関東労災病院救急総合診療科部長

外来・病棟・地域をつなぐ ケア移行実践ガイド

小坂 鎮太郎・松村 真司 編

●B5 頁184 2022年6月

定価：3,850 円 (本体 3,500 円+税 10%)

[ISBN978-4-260-04885-9] 医学書院刊



本書のケア移行をすべての医療・介護従事者が心掛けたら、この国の健康寿命、患者さんのQOLや幸福度、そして医療・介護従事者のやりがい、すべてが向上するに違いない。

本書には医療・介護現場におけるケア移行という観点で、望ましい情報コミュニケーションの実践知が詰め込まれています。特に素晴らしいのは、「相手を思いやる精神論」「顔の見える関係づくり」や「コミュニケーションテクニック」を披露するものではなく、あくまでもケア移行に必要な情報整理に絞って解説している点になります。さらには多様な現場やケアプロセスにおけるアセスメントツールも紹介されており、情報の精度をさらに高めることができます。

一方で私が圧倒されたのは、ケア移行に関する情報の質と量であり、退院時診療情報提供書、主治医意見書、入院時診療録、入院指示簿などの参考例が示されています。多くの患者を抱えて病状説明や外来に追われている医師には、ここまで仕上げる時間的余裕はなく、私も正直なところ、ここまで書けません！ それでも、何とかエッセンスを取り入れてベストな情報に近づけられるように頑張ります。というのも、診断や治療の凄腕には出会っても、情報提供の凄腕は見たことがありません。そういう意味では、最善手の情報を知ることが、この本の最大の価値と感じました。

本書は総合診療に従事する医療者だけでなく、地域連携を実施しているすべての医療・介護従事者が対象となります。情報発

信する側だけでなく、情報の受け手側にとっても、質問力・フィードバック力・確認力を向上させられるはずです。もしも、地域の関係者たちが本書を基に輪読会をする機会があれば、必要な情報を整理して、より効率的な情報共有の仕組みができるかもしれません。

日本の医療・介護システムを俯瞰しますと、強固な既得権益の業界が変わらない限り、運営母体が多様な地域包括ケアの仕組みでは、この10～20年の間に満足なケア移行が実施できるような情報デジタル連携やAI化は起こらないと断言できます。たとえSNSやメールなどデジタル媒体を活用したとしても、処方歴、検査・画像情報以外の情報においてはアナログ的な範囲は超えられません。つまり、われわれは自ら診療情報を書き続けるしかないのです！時代とともに医療技術は進化していきますが、われわれが作る診療情報も同じく進化する必要があります。まさにケア移行領域はその一丁目一番地と言えるでしょう。特に Patient Journey に寄り添った情報は進化の糸口になるはずです。そして、最も進化するべき点はケア移行の当事者、つまりすべての医療・介護従事者たちが当たり前、負担とかわず、本書に紹介されている質の情報をキャッチボールすることであり、そうした情報文化を醸成することがゴールなのかもしれません。いずれにせよ、地道な実践あるのみであり、その情報整理の基準点が『外来・病棟・地域をつなぐケア移行実践ガイド』になるでしょう。